

リド・ウォルフちゃん
(♀) が世界線を越えて
特地に放り込まれたよ
です

庵パン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙要塞ア・バオア・クー戦で戦死した筈のリド・ウォルフが、神の御業で特地に放り込まれた。

しかも！女体化というおまけ付きで！

様々なセクハライ目に遭いながら、リドの精神は男でいられ続けられるのか!?

目次

新しい褐色娘がログインしました

1

初体験

7

新しい褐色娘がログインしました

最後に見たのは眩しい光だ。

それは眩し過ぎる光だった。

ア・バオア・クーを攻略すれば、ジオンにはサイド3しか残されていない。

ビームの光が絶え間なく交錯する宇宙そらの中、戦いの終局に臨むために出撃した連邦軍のエース・リド・ウォルフは脚の無いモビルスーツと会敵した。

連邦にあんなモビルスーツはない。I F Fで確認するまでもなく敵機だ。

しかし、強者であることも戦闘感というヤツでそれとなく判っていた。かと言って見過せば味方の被害は増えただろう。

この時、既に4機以上のジオン機を撃破していたリドは79SPの照準で足の無い黒い機体を追う。

連邦軍唯一のパーソナルカラーを持ったリドの、黒とグレーで配色されたジムスナイパーIIは、そのジオンの機体……シヤア・アズブルが駆るジオングとも知らず、絶えず高速で動く世界の中で、メガ粒子砲と呼ばれてソレを狙撃用に改良したMSの銃を発砲した。

しかし、リドが思わぬ方向から発射されたメガ粒子は、彼が駆る79SPジムスナイパーIIを的確に捉えたのである。

リド・ウォルフ。

アフリカ戦線の戦闘機乗りだった彼がMSに切り替えたのは、申請していた戦闘機の代わりにジムタイプの子機のスーツが配備されてからだ。

所属していた部隊の隊長の死を切欠に奮起し、黒く塗装した量産型ガンキャノンにオプシオンパーツを取り付け、1週間で21機の敵を撃墜したエースである。

公式の生涯撃墜数はMS撃墜数68機・艦船撃沈数4隻という連邦軍第3位の腕前である。

最終階級は少佐であった。

どれほどの時間が経っただろうか。

リドはRGM-79SP・ジムスナイパーIIのコクピット内で目を覚ました。

最後に見たのはメガ粒子砲光の光だろうから、自分が今居るのが生者の世界だとは思わなかった。

だとすると、ここが所謂死後の世界なのかということが想像できる。しかしあの世に行ってもMS内のままとは意外な話だ。

何処に居るのかはという判断は保留して、現在の自分の状況を確認する。身体中の何処にも痛みは無い。

今、コクピット内が暗いのは79SPが起動してないからだ。非常灯も点いていないところを見ると、電気系統にダメージを受けたようだ。

しかも、残存する酸素量が少ないのか胸が苦しい。

MSパイロットの感覚以前に、重力がある場所に居ることは分かる。機体が何かに拠り掛かって、上体を上げていることも理解できた。

地球表面に居るなら大気圏の摩擦熱で79SPは燃え尽きているだろう。ならば宇宙漂流している間にコロニー内部に漂着した可能性がある。

宇宙要塞という可能性も考えたが、1Gの閑静重力を発生させるほど巨大な宇宙要塞はジオンにも連邦にも無い筈だ。

ここでリドは1つの可能性を考える。

「まだ生きている」

そして重力のあるコロニーに漂着したということだ。

奇跡的な話だろうが、敵のメガ粒子砲が光だけの不発ということもあるかも知れない。ならば救助要請をしてリド本人と機体を回収してもらい、早く戦線に復帰しなければならぬ。

ふと、リドは耳や頬、そして首の後ろに鬱陶しさを感じた。どうも自分の髪の毛らし
い。短髪ではなかったが、そこまで長く無かった髪の毛がロングヘアとも言うべき長さ
に伸びているのが解り、どれ程の時間を眠っていたのかと考えざるを得ない。と同時
に、ア・バオア・クー戦からどれ程の時間が経過したのか考えざるを得ないので。

これは戦争が終結している可能性が高い。

そもそもア・バオア・クーを攻略したらジオンは本拠地であるサイド3しか残されて
いないので、彼の宇宙要塞の戦いが終局した後は即座に講和を打診している可能性があ
る。

その間の食料はどうしていたのかという疑問もあるが、とにもかくにも連邦に連絡を
取ることが急務だ。リドは今居るであろうコロニーか生きていることを祈る。機能が
停止していたコロニーでも、場所次第では酸素も残っている可能性はあるのだ。

一度コクピットハッチを強制排除したら、もう元に戻すことは出来ない。だがこのま
まという訳にもいかないのは明白な事実だ。

蛇が出るか鬼が出るか判らない。幸運が続くことを神などに祈る事など本来はガラ
じやない。だが流石に今は自分の力ではどうしようもないのだ。

ならば、これ以上の幸運など祈らないで、死ぬならその天命に従うまでと考える方が
楽……。

そんな考え方をしつつも、生きる為の努力を怠る気も毛頭なくコクピットハッチを強
制排除した。当然、排除用火薬の爆発でコクピットハッチが吹き飛ぶ。

「……………空？」

吹き飛んだハッチの向うに見えたのは、青い空。そしてその両脇を囲むように突き出
た渓谷である。コロニーならば見えるべき対岸の地表や街、そして反射板がない。

リドは恐る恐る、とは言つても内心急いた気を抑えながらではあるがジムのコクピッ
トから降りた。

降りて初めて気付いたが、髪は背中にまで伸びている。

そして大気を胸一杯に吸い込むと息苦しい理由が分かった。

「なっ……………」

自分の胸から突き出た二つの丸くて柔らかい物体が、パイロットスーツを中から押し
ているのだ。その柔らかさは女性に付いているべきモノである。しかも巨大と言える。
リドが気を失っている最中に、何者かが悪戯したのだろうか。

リドは速やかにパイロットスーツのファスナーを下げ、この厄介なものを取り出そう
とした。

しかしファスナーを下げると抑え込まれていたそれは本来の巨大さを主張するよう
に弾け出すように溢れ出した。

「なん……だと……う？」

リドの目前に溢れ出したソレは、どうもリドの身体にくっ付いているらしい。余り乱暴な扱い方をすると痛いのはリド本人だ。

ここでリドは一度深呼吸する。

夢でも見ているのかも知れない。しかし、やけにはつきりした夢だ。はつきりし過ぎて現実との区別が出来ない程である。

まず自身の身体に起こった変化を確かめる。何せ髪がこれほど伸びるまで79SPの中に居て、その間飲まず食わずだ。

だからなのか、尿意や便衣など一切の排泄欲もない。排泄欲がないと言うか、色々スツキリし過ぎて股の間にあるべきモノも無い気がする。

……………自分で股をまさぐってみる。

すると無い。

「な、なんじやこりゃああああああああ!!?」

元男で元連邦軍のエースパイロットだったリド・ウォルフの叫びが、特地の警告地帯に拡がる。

初体験

完全に女体化していることに気付いたリドは暫し項垂れていたが、これが明晰夢であると思いを取り直した。

過去に明晰夢を経験したことはないのだが、はつきりと夢であることが分かる夢であると聞いている。夢ならば、散歩でもしている間に目が覚めるだろう。

そう考えれば動く気にもなると言うもの。

リドは早速コクピット内にある一人分の医療ボックスとM71拳銃とそのマガジンポーチを取り出す。

夢だからと言って裸で踊り狂う乱痴気騒ぎを起こすようなリドではない。理性的に軍人としての行動を取ることにしたのだ。

装備を揃えてみると、腹も減ったし今の時間が解らないことにも気付く。MS起動時であれば時間はヘッドディスプレイでも確認できたが、コクピット内にはアナログの時計もあつた筈だ。

取りに戻って確認すると、ア・バオア・クー攻略戦開始から104時間経っていた。4日は経っているのだ。腹も減るはず。

明晰夢なら、そのうち知った顔に会えるかも知れない。

装備を整えると、渓谷の中を道なりに歩き出した。

すると、歩いていく渓谷の正面の山影に大型の蜘蛛……いわゆるタランチュラがいることに気付いた。

虫の夢とは……若干気押しされるリドだが、大型の虫が一匹程度なら恐れるものではない。

避けて先に進むと、その蜘蛛の下部部が蠍のような形になっているのに気付いた。

しかも、それが一匹や二匹ではない。数十匹もの同じような虫が、新参者であるリドの方向を向いているのだ。

「なっ……！」

戻ってもジムが格挫しているだけで行き止まり。ならば、この場を走って突っ切るしかない。

リドは拳銃を手に邪魔な虫だけを狙い、駆け抜ける。

だが、彼等の巣穴で目立ち過ぎたのか、或は同族を殺したせいなのか、虫共の注目は一斉にリドに集まった。

走るリドの右足首に何か絡み付き、引つ掛かったものを撃ち抜くか外そうと視線を向けた時だった。

最初は木の枝か何かが引つ掛かったのだろうと思つたりリドだが、洞窟内から伸びる白い物がリドの右足を拘束していたのだ。

蜘蛛の糸かとも思つたが、それは強く締め付けると同じ物が左足にも伸びる。

それが何らかの生物の触手であると気付いた時には、リドの身体の半分以上が洞窟に引き込まれた時だった。

* * * * *

98時間後、溪谷の洞窟から出てきた襤褸ぼろき切れを纏つた女がいる。リドだ。

引き込まれた地下空間で彼……もとい彼女が見たのは、中型のプチモビルスーツほどはあろうかという巨大な蜘蛛に似た生物だった。

夢だとはいえ、恐怖を感じない訳にはいかない。咄嗟に拳銃を発砲すると裂けるような咆哮が響く。

効いてない訳ではないのだろうが、拳銃を構える手を触手で拘束され、次々と四肢を触手で縛られた。

ここで気付いたのは、前足の内の二本が鉗状になっていることだ。その後のことは、

思い出すだけでも忌々しい。

今の自分が女の身体であることを嫌でも認識させられるようなことだ。

触手に数々の液体。そして女性としては非常に扇情的になったリドの身に迫る男のモノに似たそれ。

結果としてリドの胎内を蠢くようになったソレは、昔のSFパニックホラーのように腹部を突き破って出てくるかと覚悟したほどだ。

だがソレは律儀にもリドの胎内から産道を通って外に出てきた。それからも繰り返しされる快感の地獄で何度も絶頂に達し、失神し、自身が産んだと確認したソレは10を越える。

目を覚まし、大型の虫を含む生き物が自分しか居ないことに気付いたリドはすぐに巢穴かた脱出した。

彼女が纏っている襪はパイロツトスーツだった布切れだ。サイズが合わなくなり、虫達の体液で溶かされたパイロツトスーツを胸部と腰部に巻いて、最低限に隠しているのである。

歩き始めたリドは、少ししてから大きくなった胸の痛みを感じた。

膝を突き、腕で抱えるように痛みを抑えようとするが痛みは退かない。そのうち、襪切れの隙間から白い液体が染み出すように漏れてきた。

檻樓を取り払って滝のように流れでたその液体は、紛れもなく母乳という液体。

「こんな……」

リドは米囓みに拳銃を突きつける。

「こんな悪夢があつて溜まるかア——!!!」

引き金を引けば、彼女の厳しい現実が終わっていただろう。しかし同じ時、人の叫び声があった。

言葉の意味は分からないが、緊急を告げるかのような緊迫した叫び声だ。